

I

はじめに

- 1 研究の経緯
- 2 コミュニケーション能力の育成に関するQ&A

研究の経緯

1 研究の背景と目的

中央教育審議会答申（H20.1）では、児童生徒が他者とのコミュニケーションをとれなかったり、他者との関係において容易にキレたりすることの一因として、自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが指摘されています。

また、近年いわゆる「中1ギャップ」や「高1クライシス」の問題が生徒指導上の課題となっており、これらの問題の背景には、人間関係を形成するコミュニケーション能力の不足があることが指摘されています。

当研究所に寄せられる電話やメールによる相談においても、児童生徒本人からの相談は、友人関係や親子関係など、人との関わりに起因するものが多く、人間関係を適切に築けないことに悩んでいる児童生徒の姿が伺われます。

このような児童生徒の現状を踏まえ、本研究では、児童生徒に、他者や社会などとの関わりの中で、人と共に生きる自分への自信をもたせることが必要であると考え、児童生徒の望ましい人間関係の育成に資することを目的に、児童生徒のコミュニケーション能力の育成に関する研究を行うこととしました。

2 研究の概要

研究の内容	○ 先行研究等を参考にし、発達段階に応じて身に付けさせたい児童生徒のコミュニケーション能力を整理する。 ○ コミュニケーション能力の育成に資する手法を理解する校内研修プログラムを作成する。 ○ 児童生徒のコミュニケーション能力を育成する学習プログラムを作成する。
研究の方法	○ 学習指導要領等を踏まえ、児童生徒のコミュニケーション能力を発達の段階ごとに整理する。 ○ コミュニケーション能力の育成に資する手法を理解する校内研修プログラムや、児童生徒のコミュニケーション能力を育成する学習プログラムを作成、実践し、その結果を検証する。 ○ 校内研修プログラム及び学習プログラム実施後の児童生徒及び教師の変容を分析し、作成した両プログラムを検証する。

期待される研究効果	○ 各学校において、校内研修プログラムを活用した校内研修を実施することにより、コミュニケーション能力の育成に資する手法を生かした児童生徒の望ましい人間関係を形成する指導の充実が期待できる。 ○ 各学校において、学習プログラムを計画的、効果的に活用することにより、日常の教育活動における児童生徒の望ましい人間関係を形成する指導の充実が期待できる。
年次計画	○ 平成 23 年度（1 年次） ・ 発達の段階に応じて身に付けさせたい児童生徒のコミュニケーション能力の整理 ・ コミュニケーション能力の育成に資する手法を理解する校内研修プログラムの作成 ・ 児童生徒のコミュニケーション能力を育成する学習プログラムの作成 ・ 道内外における取組の情報収集 ○ 平成 24 年度（2 年次） ・ 研究協力校における実践検証 ・ 検証結果に基づく校内研修プログラム及び学習プログラムの改善 ・ 研究報告書の作成と研究成果の普及

3 研究協力校

当別町立西当別小学校

当別町立当別中学校

当別町立西当別中学校

北海道札幌月寒高等学校〈定時制〉



コミュニケーション能力の育成に関するQ & A

Q コミュニケーション能力を身に付けた児童生徒像として、どのような姿を目指しているのですか。

A 本研究では、目指す児童生徒像を次のように設定しました。

- ◎ 自分自身の可能性を肯定的に認識し、主体的に行動する児童生徒
- ◎ 他者の考えや立場を理解し、協働する児童生徒

国語、道徳、特別活動の目標等で示されている能力や、キャリア教育で育成を図ろうとする能力などから、児童生徒が自分自身や他者について理解し、主体的に行動できるようになることが大切だと考えました。



Q コミュニケーション能力をどのようにとらえているのですか。

A 本研究では、次の5つの力をコミュニケーション能力としてとらえました。

- 「自分の役割を果たす力」
- 「前向きに考える力」
- 「自分自身や他者を理解する力」
- 「他者に働きかける力」
- 「話す力・聞く力」



目指す児童生徒像として設定した「自分自身の可能性を肯定的に認識し、主体的に行動する児童生徒」、「他者の考えや立場を理解し、協働する児童生徒」を育てるために必要であると考えられる、コミュニケーションに関わる諸能力を5つに分類しました。

これらをさらに、発達の段階に応じて、具体の姿として一覧に整理しました。



Ⅱ章—1「身に付けさせたいコミュニケーション能力の分析」を御覧ください

Q 児童生徒のコミュニケーション能力を育成する指導の充実を図るために、どのような校内研修が効果的ですか。

A 教育相談の手法や児童生徒への教育相談的な関わり方を理解することが有効です。

児童生徒のコミュニケーション能力を育成するに当たっては、児童生徒への関わり方の基本として、教育相談の手法や、教育相談的な関わり方を理解しておく必要があります。

そこで、教育相談の代表的な手法である「構成的グループエンカウンター」、「ピア・サポート」、「アサーショントレーニング」に関する校内研修の進め方の例を、「校内研修プログラム」として示しました。



Ⅱ章－2「コミュニケーション能力の育成に資する手法を理解する校内研修」を御覧ください

Q 児童生徒のコミュニケーション能力を育成するために、どのような指導をすればよいのですか。

A コミュニケーション能力を高めるという視点で、日々の授業を充実させていくことが大切です。

学習指導において、児童生徒のよいところを積極的に評価して声かけしたり、児童生徒が互いに認め合う場面を設けたりするなど、教師の働きかけを工夫することによって、教師と児童生徒や児童生徒同士の信頼関係が深まり、児童生徒のコミュニケーション能力の向上をより促すことができると考えます。

そこで、コミュニケーション能力の育成に向けた教師の指導のポイントを明らかにした指導の具体例を、「学習プログラム」として示しました。例示した指導のポイントは、他校種や他学年における指導及び他の教科・領域等の指導にも応用することができます。



Ⅱ章－3「コミュニケーション能力を育成する指導の工夫」を御覧ください

Q 児童生徒のコミュニケーション能力の傾向を把握する方法はありますか。

A 本研究では、子ども理解支援ツール「ほっと」を活用しています。

本研究では、研究協力校における実践結果を分析する方法の一つとして、子ども理解支援ツール「ほっと」を活用しています。

「ほっと」は、北海道教育委員会と北海道医療大学が共同で開発した児童生徒のコミュニケーションの実態を測定することができるツールです。

「ほっと」では、先行研究から見出されたコミュニケーションに関する13の要素に対し、児童生徒の発達の段階に応じて、その到達度を見取る質問項目が設定されています。

【コミュニケーションに関する13要素と「ほっと」のアンケート項目（小学校高学年の例）】

13要素	要素の説明	アンケート項目	
挨拶や感謝	挨拶や「してもらったこと」への感謝ができるか。	1	誰にでも自分からあいさつをすることができる。
		2	何かをしてもらった時に、感謝の気持ちを伝えることができる。
発言や説明	意見や欲求を主張できるか。	3	みんなに聞こえる声で発言することができる。
		4	自分の考えを相手にわかりやすく発表できる。
仲間づくり	対人参加や、仲間と協調することができるか。	5	自分から仲間の輪に入ることができる。
思いやり	相手への配慮や親切、援助ができるか。	6	年下の子の面倒をみることができる。
拒否	断ることや、他者からの無理な働きかけに「やめて」と言うことができるか。	7	危険なことに誘われても、断ることができる。
緊張	緊張や不安によって話せなくなることがあるか。	8	緊張して話したり答えたりすることができないことがある。
賞賛	相手をほめたり喜ばせたりすることができるか。	9	がんばっている友達を認めてほめることができる。
		10	誰にでも笑顔で接することができる。
ルールやモラル	規則や秩序を維持したり、不適切な行為を謝罪できるか。	11	時間を守って行動することができる。
		12	間違ったことを素直に謝ることができる。
助言や注意	社会的な望ましさを促進する働きかけができるか。	13	よくないことをしている相手に注意することができる。
自律	協調性や我慢などの自律的な行動ができる。	14	自分の思い通りにならないときでも我慢することができる。
学業	学習に関連した望ましい行動ができるか。	15	友達に勉強を教えてあげることができる。
		16	ノートの取り方を工夫している。
リーダーシップ	集団をまとめることなど、リーダーシップ行動ができる。	17	対立した意見が出たときに、よりよい意見を考えることができる。
		18	班長などになったとき、自分の役割を果たすことができる。
相談	相談や自己開示ができるか。	19	困ったことや悩みを他の人に相談することができる。
		20	自分の趣味や関心のあることを他の人に話すことができる。

（北海道教育委員会・北海道医療大学 「ほっと」を使おう！小・中学校用）